研究ノート

左利き日本語学習者への漢字指導に関する小考
～左手書字専用筆順の提案

内　山　和　也

1．漢字学習と筆順について

1.1. 非漢字系学習者による左手書字

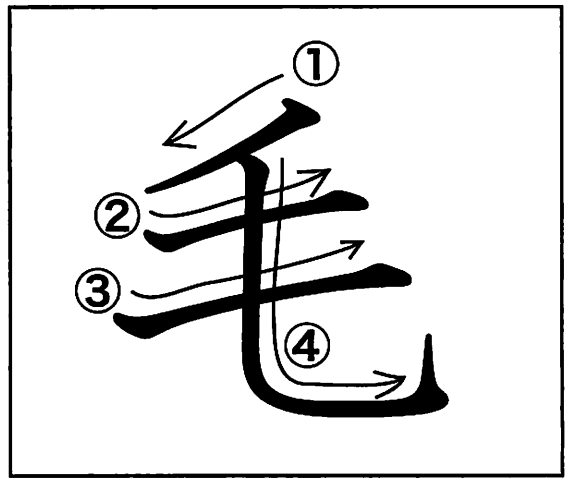
漢字の読み書きが、非漢字系の日本語学習者にとって日本語学習の大きな障碍になっていることは、周知である。非漢字系の日本語学習者では、漢字がなかなか習得できないことから、漢字に強い苦手意識を持ち、あるいは、漢字や漢字学習の価値を認めようとせず、漢字の読み書きができないばかりか、ひいては、書記言語そのものへの興味を失ってしまうこともある。しかし、日本での言語生活を考えた場合、口頭言語の運用能力だけではまったく事足りないことはいうまでもなく、書記言語での劣等な運用能力は、就学や就職において小さくないハンデキャップを抱えさせることになる[1)]。

非漢字系の日本語学習者への漢字の指導については、これまでも、様々な方法が提案されてきた。その一方で、漢字の学習は、字形（書き方）のほか、読み（字音、字訓、熟字訓）・字義・熟語としての用法・送り仮名など、多岐にわたって時間がかかるうえ、漢字を語彙の学習の一部と見る立場もあることから、教室よりも自学に委ねられる部分も少なくない。かかる問題を踏まえて短時間学習ができる漢字教材の開発を試みる濱田ほか（2006）のような取り組みもあるが、漢字の学習が非常に手間のかかる道程であることは疑えないものと思われる。その中で、実際に、非漢字系の日本語学習者を観察すれば、左利き（左手書字）であることが漢字の習得を一層困難にしている例が見られる[2)]。

ミルソム（2009：88）は「左利きの問題が最も顕著にあらわれるのが、文字を書くとき」だと指摘している。いわゆる漢字文化圏では、さらに顕著であろう。これは、左利きから右利きへの『矯正』によっても推測できる。八田（2008：65ff.）によれば、アルファベット圏での調査では左利きの割合が10～15％になるのが通例だが、日本での調査では、３～５％程度であり、台湾の調査では２％以下であったという。これらの調査結果は、利き手の矯正が、漢字文化圏でより一般的であることを示唆するものといえよう。

1.2. 筆順の問題

漢字文化圏において、教師や親といった周囲の大人たちによって、子どもの利き手の矯正が積極的に行なわれがちなのは、漢字の使用に先立って、その習得が困難になるという背景があるものと考える。そこに大きく関与するのが筆順の問題である。ここで、筆順ないし書き順 (stroke order) とは、文字を筆記する際に、個々の点画に与えられた規範的な順序と方向性のことである。例えば、「毛」の字の筆順は、数字の順番・矢印の方向だとされる（下図）。



筆順は、具体的な書字過程の中でのみ具現化されるもので、書きやすさ・読みやすさ・覚えやすさという機能的要素で構成されていると考えることができる（押木1997）。日本の国語教育の中では、これらの機能的要素が担う合理性や機能

美から、〈正しい筆順〉の〈効率的な指導〉が求められてきたようである[3]。日本語教育における漢字指導でも、漢字の字形を維持するために筆順の指導は重要だと考えられてきた[4]。国立国語研究所（1988：95）は「非漢字系学生では、日本で一般的に行なわれている筆順で指導するのがよいことは当然である。筆順が一定していれば、早く書いた時やくずした時でも、日本人のくずし方と同じ形になって誤読されることが少なくなる」と述べている。また、濱川（2010；38）は、「筆順や画数を教えることに対して、教師の持つビリーフはさまざまであろう」としながらも、筆順を書き写すタスクなどを通じて、筆順の基本や原則を学ぶことは有効だと述べており[5]、石田（2007：47f.）でも、非漢字系学習者に対しては、初級の前半を終えるまでには筆順の原則（文部省「筆順指導手引き」に準拠）を指導すべきであるとしている[6]。

1.3. 筆順の身体性

筆順が、字を書くときにのみ関与する[7]ということは、それが必ず身体的な制約のもとにあることを意味している。漢字の字体構成は、毛筆での運筆を基準にしているということができる。しかし、毛筆での一般的な運筆は、右利きの者から見るかぎり、左手で再現することが困難な動き（身体性）を含んでいるように思われる[8]。仮に漢字が左手で書きにくい文字なのであれば、漢字を習得しようとするときに左利きであることは、潜在的に不利だと考えられる。漢字の習得では、漢字を繰り返し書くという学習法が、最も一般的で効果があると考えられるからである[9]。

そのため、日本語教育の現場で、非漢字系学習者が四苦八苦しながら漢字を書いている様子を見れば、正しい筆順の指導が必要だと考えたくなるのも無理はないのではないかと思う。筆順が、それに期待される機能（書きやすさ・読みやすさ・覚えやすさ）を担うものなのであれば、学習者の負担を軽減するために正しい筆順を指導することは合理的であり、推奨されてよいはずである。

実際に、非漢字系の学習者への漢字指導では、筆順の指導が有効だとする報告もある。たとえば、奥村（1999：46）は、非漢字系の学習者が漢字学習を忌避するときには、「多くの場合、筆順の原則を理解・習得していないのがひとつの原因である」と述べ、筆順の指導に十分な時間を充てるのが漢字の習得に有効だと述べているまた、同じ漢字文化圏の中にあっても、言語ごとに筆順の規範に異同のあることが知られているが、鈴木（1987：144f.）は、既存の筆順をもとに日本語教育用の合理的な筆順体系を構築するように提案している。非漢字系の学習者の漢字の習得に筆順が効果的な役割を担っているとの認識から、「漢字習得のために最も効果的に寄与する矛盾のない筆順体系」を構築して非漢字系の学習者を指導すべきであるという主張である。

このように、筆順が、その機能（による有効性）によって漢字指導の現場に導入されるものであれば、阿辻（2008：104）も指摘するように、左手書字用の筆順が用意されることも自然だと考えられるべきなのではなかろうか[10]。

1.4. 左手書字専用筆順

松本（2012：28f.）は、非漢字圏の人には『点画』の概念が欠損しがちだと述べている。言い換えれば、非漢字圏の人には、われわれ漢字文化圏の者が考えるよりも、漢字がより絵画的だということである。デリダ（1978：186ff.）が述べているように、いかなる文字であろうと、同時に必ず絵画でないものはありえないのである。一般に、われわれが文字と絵画とを区別しようとするときには、同じ形象を反復して汎用できるかどうかを基準とする[11]。漢字も、その視覚的イメージだけをとれば、文字であることも絵画であることもできる。その形象を絵画として捉えるかぎりは、異なる文脈で異なる経験に直面することになり、場当たり的で非効率的な漢字の読み書きを免れることはできないものと思う。他方、その形象を文字（字体）として捉えようとする場合には、点画の概念を理解することが必須であろう。漢字を点画の組合わせによって構成されたものと考えることが、それを絵画と峻別する方向につながるのだと考えることができる。この点画の概念

が、漢字を書くという経験の中で、筆順と密接に結びついているわけである[12)]。

筆者は、左利きでも左手書字でもないが、もしも彼／彼女が左利きであるなどの理由で、左手で字を書くことが自然ないしは必然的であるというのならば、彼／彼女には左手で自然に書ける書き方で漢字を指導するべきであると思う。もちろん、これは、漢字をいかなる自由な書き方で書いてもよいという意見ではない。漢字について、そこに唯一絶対の正当な筆順がないことは、阿辻（2008）、財前（2011）、江守（2012）、松本（2012）などで指摘されているとおりである。しかし、唯一の〈正しい筆順〉がないからといって〈間違った筆順〉もないと考える必然性はないであろう。したがって、左手書字に見合った筆順（基準ないし規範）があってもよいはずなのである。本稿では、非漢字系で左手書字の学習者が漢字を書く際に用いるべき筆順について、一案を提示したいと思う。

2．左手書字における筆順について

左手書字用に提供される教材は少ないのではないかと思われる。左利き用を謳った文字練習帳に岡田（2004）があるが、これは「左利きの方が練習しやすいように、『きれいな字が書けるボールペン字練習帳』の左右頁を入れ替えたもの」であり、左利き（左手書字）用に特別な工夫がされているというわけではない。ここでは、左手書字の非漢字系学習者への漢字指導で目安とする左手書字専用の筆順を提案したいと思う。なお、以下に示す具体的な筆順については、左利き（左手書字）の漢字系学習者が実際に行なっていた書字行為から帰納した順序をもとに、先行研究の知見を参考に加えて整理したものである。

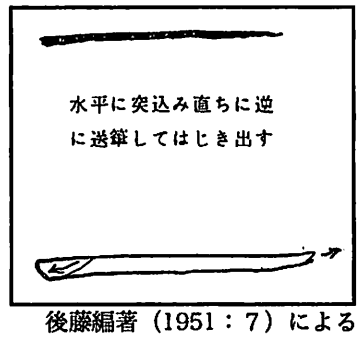
2.1. 部種の構成

左横書きでは、文字を左から右に向かって連ねてゆく。そのため、書字方向（左から右）をできるだけ逆行しないために、部首のレベルの構成では、右手での書字と同様に[13)]、左から右の方向（例：偏→旁）で書くのがよいだろうと思う。また、このことは、鏡文字（正体と左右対称の字形で書かれた文字）になるのを防いだり、適正な文字間隔を保守することにもつながるはずである。

2.2. 横画の書き方

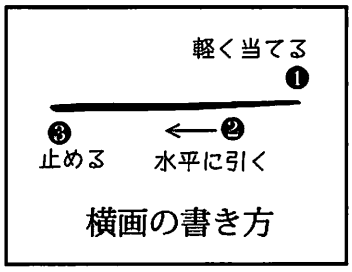
では、線のレベルではでどうであろうか。左から右（→）に線を引くとき、右手での書字では文字通りに「引く」動きになるが、左手での書字では左から右に「押す」動きになる（なかの2008：65）。ミルソム（2009：54ff.）では、左利き用の筆記姿勢について、できるだけ書字面（用紙など）を時計回りに傾け、押すのではなく手前に引くよう書くことを薦めている。押して書くと、ペン先が紙に引っ掛かったり刺さったりするからだという。さらに、ミルソム（同書93）は、文字の横線を書く必要がある場合には、「左利きの人にとって書きやすい［右から左に向かって書く：引用者注］筆順も例外的に求められるべき」だと主張している。左手書字で横画を右から左（←）に書くことは、なかの（2008：74）でも提案されている。しかし、小野瀬（1995：529）の報告によれば、文字を書き慣れていない年齢の幼児（右利き）への実験では、「一」を右から左（←）に書く方が書きやすく、指先の負荷（筆圧）も小さい傾向があったという。漢字に慣れた私たちは、左手書字では右から左（←）の方が書きやすいと考えがちだが、文字として水平な線（横画）を書き慣れていない者にとっては、左手書字でも左から右（→）の「正しい筆順」の方が書きやすい可能性があるわけである。

一方、後藤編著（1951：8）は「起筆を斜め上から、若しくは上の方から打ち込んで頭部をまず作り方向を横に変えて送筆し、停まってからまたあらためて終筆を打ち直すという煩わしい横画筆は、毛筆時代の遺物であって、ペン字には当てはまらない。ペンの横画は水平運動1つである」と述べ、毛筆楷書を基準としない筆法（亀甲獣骨文字・古文に準拠）が望ましいと説いてい



後藤編著（1951：7）による

る。この主張は、ペン字による左横書きでは合理的なものと思われる。しかし、かかる筆画を左手書字で再現するとき、押して書く方向（→）では線を水平に勢いよく払うように書かねばならず、自然な動きとは思われない。一方、引いて書く方向（←）では、軽く起筆して終筆を止めることにより、自然な横画を書くことができるのではないだろうか。そのため、ボールペンや鉛筆・シャープペンシルなどを前提にすれば、漢字については、線の方向を引いて書く方向、つまり、左手書字では右から左（←）で書くことを基本と考えたい。



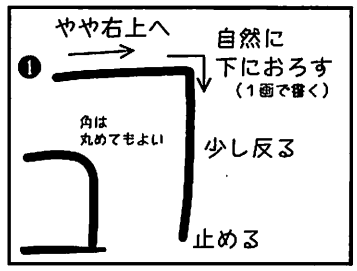
横画の書き方

2.3. 縦画の書き方

「千」などの縦画（丨）の終筆は、止めと払いのいずれもが許容される（江守2012：224）。実際には、止めても払っても字形の差は僅かであり、左手書字の場合には、止める字形がよいものと思う。終筆を払った場合、書き方によっては、線が右側に流れて左に傾いた不自然な字形になるおそれがあると考えるからである。

また、縦画を止めるか撥ねるかの許容について、「常用漢字表」では、『木』や『来』などの縦画を止めるか撥ねるかは、筆写における表現の差であって本質的な違いはないとしている。一方、江守（2012：227）は、手書きでは撥ねるのが自然であり普通だとしている[14]。しかし、左手書字では、できるだけ左撥ね（鉤）を作らずに止めて書くのがよいのではないかと考える。これは、左手書字で左撥ね（鉤）を書くと、ペンを外側に開く方向になるため、左跳ねが大きくなりやすいものと思うからである。不自然な字形を避けるため、『水』や『寸』の字、手偏（扌）や獣偏（犭）のように撥ねない字形が一般的でないものを除き、『亅』ではなく『丨』と書くのがよいのではないだろうか。また、撥ねるべきかどうかの基準が必要になろうが、実際的な手段としては、明朝体やゴシック体のデザインを目安にすることが考えられる。

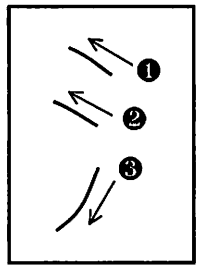
2.4. 横画と縦画の接合



「口」の字などの『冂』の画（折）は1画で書く。2画にわけて書くと横画と縦画の接合部が離れてしまい、誤読につながる字形の逸脱が生じやすいと考えるからである。このとき、横画を左から右に押して書き、そのまま自然に縦画に移行するように書く。横画を右上がりにして縦画を外側（右寄り）に少し反らすようにすると書きやすいだろう。「口」など、下に横画があるときには角を少し丸めてもよいかもしれない。

2.5. 点の書き方

点「丶」については、特殊な書き方であるが、下から上に向かって（↖）書くことを提案する。逆に、撥ね「㇀」は上から下に向かって（↙）書くようにする（左払いと同様の書き方）。一般的な書字とは逆方向になるが、この方が左手書字では書きやすいのではないかと思われる[15]。したがって、例えば、さんずい偏（氵）を書くときには、上の画から順に〔↖　↖　↙〕の方向で書くことになるだろう。ただし、「首」の1画目のように筆脈が右に向かう点については、上から下に（右払いのように）書くのが自然であろう。



2.6. はらいの書き方

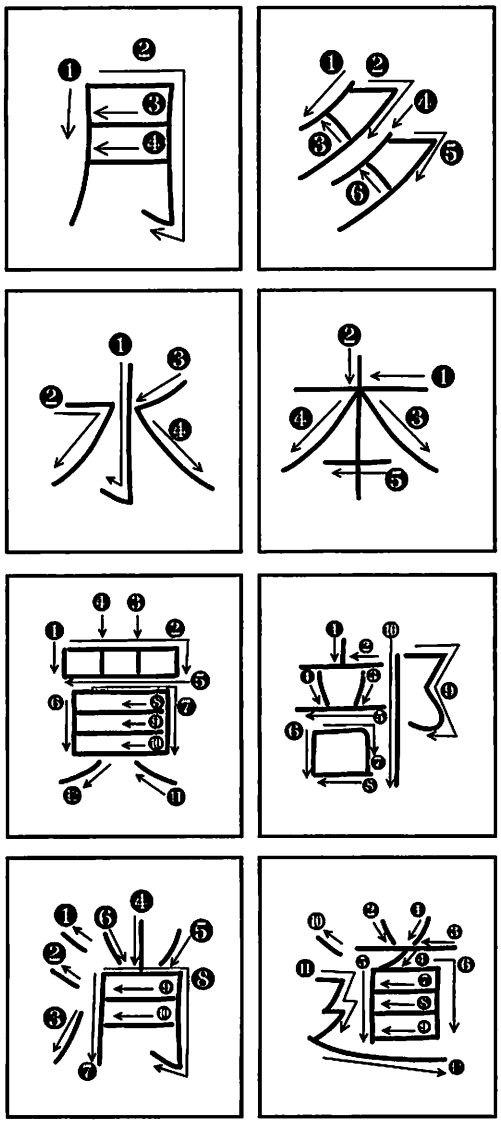
後藤編著（1951：135）は、左横書きでは、右払いと左払いを区別する従来の筆法を改め、左右を等しく同じ筆法で書くべきであるとしている。左手書字では、右払いの終筆を三角形につくるように書くのは、ペンを押す動きになって不自然であろう。そのため、右払いと左払いは同じように書くようにしたい。線をやや内向き（下側）に反らせ、寝かせ気味に書くと書きやすいのではないかと思う。

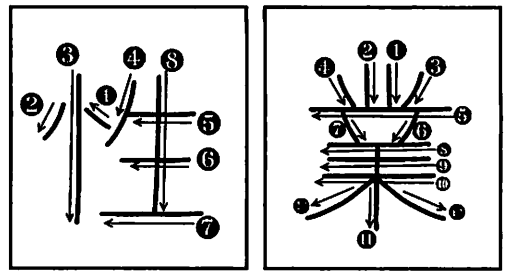
2.7. 画の間の順序

2.1.で述べたとおり、部首の間の順序は左から右、上から下とすべきであると考える。一方、「曲」の縦画など、同じ画が並列するときはどうであろうか。このような場合、左手書字では右の画から左の画の順に書く方が自然であると思われる。同様に「文」の右払いと左払いなど、左右対称になる画も右の画から左の画の順に書くのがよいであろう。

3. 漢字の筆順の具体例

2章では、左手書字専用の筆順の原理について考えたが、ここでは具体的に漢字の字例（月、多、水、本、買、部、消、道、性、業の10字）を挙げておく。





4. まとめ

以上、非漢字系で左手書字の学習者が漢字を書く際に用いるべき筆順についての案を述べた。しかし、十分な体系性に欠けているほか、改善すべきところも多いものと思う。今後は、漢字指導の実践を通じて、学習者の意見をとりいれながら、より体系的な整理を目指したいと考える。

注

1）通用の表記法の変革（例：漢字の廃止、カタカナ専用）が本来であるとも思うが、本稿とは趣旨が異なるのでくわしく論じることはしない。

2）筆者が非漢字系の学習者から聞いたことばに「自分は左利きだから漢字が読めない」というものがあった。書く方は措くとしても、左利きだから漢字が読めないという主張は一見まったくのナンセンスであるが、これは左利きが漢字の習得を一層困難にしている例であろう。

3）たとえば、江守（2012：10）は、字形が維持されれば筆順は重要でないとする考えを「たいへん乱暴」としたうえで「筆順には、長い間の筆写の習慣によってだんだん固まってきた順序である。従って、これらの筆順どおりに書けば筆の運びが自然で整った美しい形に書くことができる。」としている。また、陰山（2006：2）でも「漢字を正しく書くいちばんのポイントとは『きれいに書く』ことです。そして、きれいに書くポイントは『書き順を正しく書く』ことです。」とされている。

4）手書き認識可能なツールやデバイスが普及する以前には、字書を利用する（文字の画数

を数えて総画索引を引く）ために筆順の知識が不可欠という事情もあったものと思う。

5）秋山（2012：63）によれば、日本語教育機関の教員78名を対象にした調査紙調査で、「筆順指導を行なうべきだと思いますか」かという設問に対し、「行なうべき」が51%、「行なわなくてよい」が10%、「どちらでもない」が39%であったという。「行なうべき」の51%は、小中学校の国語教員よりも低いが、これは日本語教育が「書くことよりも話す（聞く）ことを重視しているため」だと述べている。

6）1990年代のインターネット普及初期に構築・運用されていた日本語学習サイトにマサチューセッツ工科大学（MIT）の『JP NET』（リソースは、http://web.mit.edu/jpnet/に現存）がある。政府、財団、企業からの数百万ドルの研究費が投入された巨大プロジェクトであった。その一部をなした「Kanji Project」では、テキストの漢字のリストから参照できる個々の漢字のデータ（HTML）に、音訓や発音だけでなく、漢字を実際に毛筆で筆記する様子を撮影したQuickTime動画（.movフォーマット）が含まれていた。90年代当時の通信環境やコンピュータの性能は現在に比べて格段に劣悪であり、動画を必ずしもスムーズに再生できないおそれもあったと思うが、『JP NET』の創設者である宮川繁は、当時広島大学で行なった『JP NET』のデモンストレーションにおいて、字形維持の上で筆順が特に重要だと考えるために動画データを提供しなければならないのだとする見解を述べた。なお、90年代には日本国内でも、小森ほか（1995）が漢字の筆順をHyperCard上で動画として示す試みを報告しているほか、龍岡ほか（1996）が筆順習得のためのCAI教材の開発について報告している。

7）いいかえれば、紙などに印刷された文字やディスプレイに電子的に表示された文字などには、筆順の概念を適用する必然性がないということである。

8）そのため、書道では右手での書字が求められる。たとえば、渡瀬（2008；60）は「他のことなら、左手でも何とかできたりするのだが、『習字』だけは右手で書くのが決まりになっている。日本語の文字の構造上、どうしても左手で書くのはダメらしいのだ。左利きには何とも悩ましい授業なのである」と述べている。

9）張（2009）によれば、非漢字圏からの中国語学習者の漢字学習方略としては、漢字を繰り返し書くことが最も一般的である。また、同論文では、語彙と漢字とを切り離して学習する方が効果的だとの実験結果が報告されている。

10) なかの（2008：71）は、日本語教育では、左手書字者が、自由意志と自己責任の理論（字形が維持されれば筆順は厳密でなくてもよいという考え）によって放置されていると指摘し、「もし切実に筆順が学習者の日本語書字になくてはならないものであるのならば、左手書字者用の筆順を、日本語教育者は確立するべきではないか。」と述べている。

11) たとえば、マグロもヒラメもコチも、文字で表わせば同じ「魚」で済むが、それらを絵画で表現しようとすれば、三様の異なった形象が必要になる。

12) たとえば、『口』という漢字で「冂」がひとつの画であることは、「冂」の画にひとつの順序（筆順）が与えられることと同等である。

13) Oshiki and Isono（1997）は、漢字における（点画）要素の構成の方向性を分析し、部首の組合わせに相当するようなレベルでは、〈左から右〉と〈上から下〉がほとんどであるとしている。

14) 撥ねは、古くは筆遣いとして存在せず、紙と筆による筆写の結果として生じたものである（阿辻2008：107ff.）。

15) 小野瀬（1995：529）によれば、幼児（右利き）の書字実験において、「／」の線では

「↗」の方向で書く者が多く、筆記速度も速かったという。

参考文献

秋山英治（2012）「国語教育・日本語教育における筆順指導の実態及び意識に関する研究」，『漢字・日本語教育研究』１（財団法人日本漢字能力検定協会漢字・日本語教育研究助成制度報告書）,pp.4-99, 日本漢字能力検定協会［online］www.kanken.or.jp/aid/pdf/a1.pdf.

阿辻哲次（2008）『漢字を楽しむ』（講談社現代新書1928）講談社.

石田敏子（2007）『入門書き方の指導法：日本語の教え方を一から学び直したい人へ』アルク.

江守賢治（2012）［1980］『正しくきれいな字を書くための漢字筆順ハンドブック（第３版）』三省堂.

岡田崇花（2004）『左利き用ボールペン字練習帳』日本文芸社.

奥村智紀（1999）「表語性に重点をおかない漢字指導：入門期における実践を中心に」，『長崎大学留学生センター紀要』７, pp.45-62.

押木秀樹（1997）「手書き文字研究の基礎としての研究の視点と研究構造の例」，『書写書道教育研究』11, pp.25-36.

小野瀬雅人（1995）「筆順に関する心理学的研究：筆記方向と手先への運動的負荷の関連を中心に」，『日本教育心理学会総会発表論文集』37, p.529, 日本教育心理学会.

陰山英男（2006）『陰山メソッド徹底反復「(新)書き順プリント」小学校１・２・３年生』小学館.

久米公編著（2011）［1988］『学習指導要領準拠漢字指導の手引き（第７版）』教育出版.

国立国語研究所（1988）『文字・表記の教育』（日本語教育指導参考書14）大蔵省印刷局.

後藤海堂編著（1951）『ペン字横書きの理論と実際』日本学芸書院.

小森早江子・上田美紀・松野了二（1995）「HyperCardを利用した漢字学習プログラム開発の試み」，『日本語教育方法研究会誌』2(1), pp.6-7.

財前謙（2011）『字体のはなし：超「漢字論」』明治書院.

鈴木慶子（1987）「日本語教育における筆順の許容について」，『書道研究』1(1), pp. 138-145, 美術新聞社.

龍岡亮二・吉村ミツ・前田和昭（1996）「インターネットを利用した外国人・小学生のための漢字学習支援システムの開発」，『情報処理学会研究報告：人文科学とコンピュータ研究会報告』96(110), pp.13-18, 情報処理学会.

張金蘭（2009）「試探『識寫分流』策略對外籍生漢字識寫能力之影響—以非漢字圈零起點學生為主所做的教學實驗」，『中原華語文學報』３, pp.55-74.

デリダ,ジャック（1978）『根源の彼方に：グラマトロジーについて』足立和浩訳［1967］, 現代思潮社.

なかのまき（2008）「左手書字をめぐる問題」，『社会言語学』８, pp.61-76, 「社会言語学」刊行会.

八田武志（2008）『左対右きき手大研究』化学同人.

濱川祐紀代編著（2010）『日本語教師のための実践・漢字指導』くろしお出版.

濱田美和・髙畠智美・市島佑起子（2006）「短時間学習を意識した初級日本語教材の開発とその効果—初級漢字教科書『留学生のための毎日のKANJI』」，『富山大学留学生センター紀要』５, pp.17-25.

松本仁志（2012）『筆順のはなし』（中公新書クラレ435）中央公論社.

ミルソム, ローレン（2009）『左利きの子：右手社会で暮らしやすくするために』笹山裕子訳［2008］, 東京書籍.

渡瀬けん（2009）『左利きの人々』（中経の文庫505）中経出版.

Oshiki, Hideki and Isono Mika "Systematization of the Stroke Order of Chinese Characters for Foreign Students" Conference of International Graphonomics Society (IGS), 1997.

謝辞
本稿の作成にあたっては、台湾の廖庭寛氏から多くのアイディアをいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

(2013年3月25日受付)